



「足利義政」という視点

この年末年始に門井慶喜『銀閣の人』とドナルド・キーン『足利義政』を読んだ。ともに足利義政に焦点を当てた小説と論考だ▼コロナで世界は一変し、ミコトコロナの時代をどう生きるか模索が続く。また地球の温暖化への対策が必須とされる中、農業革命、産業革命、情報革命に続く第四の革命が求められている。現代に生きる我々はまさに時代の転換点に立たされている▼我が国の歴史を眺めてみれば、織田信長による天下統一、明治維新による近代への移行、敗戦による天皇を中心とした体制の転換等、いくつもの転換点を経過してきた。そうした中での異色の存在が足利義政だ▼あらためて述べるまでもないが、義政は室町幕府の第八代将軍であり、三十三間堂、六波羅蜜寺、千本釈迦堂の三つの寺以外、京都にある寺はすべて戦火で破壊・焼失したともされる応仁の乱の時の将軍でもあった。義政は政治への意欲は乏しく、妻・日野富子に任せて、自らは東山殿（銀閣寺）の建設にすべてを賭けた。「文化の力で、政治に勝つ」を実践し、「最悪の将軍」としてその評判は今日に至るまですこぶる悪い▼しかしながらその義政によつてリードされた「東山文化」は、連歌（後に俳句）、書院造、水墨画、茶の湯、生け花、庭園等として現代にまで引き継がれ、日本文化の土台を形成してきた。義政は日本史上、最も大きな影響を与えた人物と違って間違いない▼義政の根幹にあつたのは「わび」「さび」に通じる「不足の美」という認識・視点ではないか。今、モノと金、GDPと成長なくして未来は展望できないとする論調が大半を占める。皆が認める流れでの変革がどれだけのものかを義政は示している。透徹した目を持って、隠されている変革の芽を拾い上げ育てていくことが必要なのではないか。

(土着菌)